同窓会報

第68号
令和５年２月28日

発行所
宮城県伊具高等学校
同　窓　会
宮城県伊具郡丸森町雁歌51
TEL 0224-72-2020
URL　http://www.igukou.com
発行責任者　橋浦　勉

印刷所
佐藤印刷株式会社

伊具高校生、コロナに負けないで

伊具高校同窓会
会長　湯村　勇

伊具高校同窓会の皆様方、こんにちは。ご家族お揃いで、令和５年の新春を迎えられたこととお慶び申し上げます。もう３月。正に「光陰矢の如し」の感が強く、また、時間の有効な使い方に心がけをしているところです。

常日頃、同窓会事業に対し、ご理解とご支援を賜り、厚く御礼を申し上げます。

私は一昨年の総会で、本校同窓会会長に選任され、早くも約２年が過ぎようとしております。

ところが、３年ほど前から新型コロナウイルスの感染が始まり、いまだ終末を迎えることなく、世界人民に震撼を与えておりますこと、極めて残念でなりません。

このため、本同窓会の設置目的である「会員相互の親睦を厚くし、母校の発展・地方文化の向上を図る」ことがほとんど不可能となっております。

私は同窓会会長として、学校と常に連絡を図りながら、会則にある目的達成に頑張ろうと思っておりますが、なんせ、多人数の集いや過度な行動などは差し控えるように、国・県・市・町などから指導がありまして、これらを忠実に守らなければなりません。この趣旨について会員皆様方のご理解をお願い申し上げます。

本校は２０２０年に創立百周年を迎え生徒は勿論、同窓会員、教職員、地元の方々の心には大きな希望や誉れが輝いているに違いありません。

今、新型コロナウイルスの感染防止が叫ばれ生徒の皆さん方は、目立つ行動を自粛しなければなりませんが、マスク、換気や手の消毒など基本的な行動に十分意を使い、コロナに負けないで頑張ってください。

最近の伊具高校の動きの中で心に強く感じていることを２、３述べてみたいと思います。

「地域連携　伊具高校生」

伊具高校は小野正美校長を先頭に本校教育方針に向かい、大きな成果を挙げておりますことはご同慶の至りであります。特に地域連携の取り組みはここ数年で認知度も上昇し、今年度も農学系列の棚田プロジェクトや花のたすきプロジェクト、機械系列の伊具高の力プロジェクト、福祉系列の家庭クラブ委員による防災や避難に関する丸森町との連携などは新聞で取り上げられ、全国各地から高い称賛を頂いております。

これを元にして、将来への夢を紡いでいただけるものと信じます。

「頑張れ！ドローン」

こういった地域に溶け込む伊具高校の教育方針に新たな授業を加えようとする考えに同窓会でもバックアップしようと考えます。

今、日本国中の人々が興味を持っている「ドローン」のことです。このドローンを伊具高校で他の高校に先駆けて授業に取り入れるというのです。

その前にドローンについてお話をします。ドローンとは「操縦士が乗らない無人飛行機」と言えます。大きさは全長30センチ程度の小型から30メートルほどの大型のものまでさまざまです。小型カメラで地上を撮影できない景色が撮影できるのです。

ドローンの使い道は写真撮影や授業だけではなく、一般向けの農業用にも幅広く利用できます。農薬散布、播種、肥料散布、情報収集など。他に言えば果樹の受粉、鳥獣害対策・・・。

大昔、角田市内で稲の消毒に大型ヘリコプターを活用し、害虫駆除を行い、住宅地域にも広がり、衛生上問題になったことが私の頭をかすめます。

昨年８月の総会で、伊具高校側から初めて同窓会側に２台の資金の一部援助を持ち掛けられました。ドローンの購入については、県内で２校が計画しているようです。県教育委員会は予算が厳しく、なかなか厳しいといいます。今年の春には詳細な金額や予定などが学校から示されると思いますので、同窓会では全面的に協力をしたいと考えております。

「若さを描いた、ＣＭ大賞」

新春の１月３日、ＫＨＢ東日本放送で「みやぎふるさとＣＭ大賞」の放映がありました。県内市町村が自分の街の魅力を県民に知らせる番組で、毎年行われています。放送時間はわずか30秒。放送１か月前の１２月、そのテレビ収録が行われました。

この番組に出場したのが、伊具高校生の男子３人。丸森町観光地の目玉である百々石公園、阿武隈川ライン船下り、齋理屋敷など高校生らしい若さを前面に打ち出し、それらしい番組にまとめました。写し出された映像は視聴者に感動を与え、「観光丸森」を十分表現していました。

私も最後まで目を凝らして見ました。完全にＣＭ大賞間違いなしと思われましたが、選外でした。３人は「素晴らしい経験をした。来年は必ずゲット！」と話したとか・・・

今年の干支は「ウサギ」。うさぎ、ぴょん、ぴょん、高く飛び跳ね飛躍の年へ。今年もよろしくお願いを申し上げます。

結びに、会員の皆様方の益々のご精進をご祈念申し上げ、ご挨拶とさせていただきます。

地域の県立高校として

校長　小野正美

同窓生の皆さまには日ごろより本校の教育活動に対しまして深いご理解とご支援を賜り、心より感謝申し上げます。今年度もコロナ禍での一年間となりましたが、教育活動は概ね計画通り進めることができ、同窓会の活動も夏の総会は行うことができました。総会では生徒の様子や学校の取り組み等についてご報告、ご説明させていただき、貴重なご意見を賜ると共に、後述するご理解とご協力を頂戴することとなりました。改めまして衷心より御礼申し上げます。

さて、今年度は48名の入学生を迎え、全校生徒１７０名で本校１０２年目をスタートいたしました。今年度は重点目標として『⑴開かれた学校づくりと特色ある学校づくりの推進と広報活動の充実　⑵主体的・対話的で深い学びにつながる授業力の向上と基礎学力の定着、ＩＣＴ機器の利活用　⑶基本的な生活習慣やマナーの定着指導と活気ある学校づくりの推進　⑷希望進路１００％達成に向けた組織的な取組　⑸清掃指導の徹底と心身の健康管理の推進　⑹４系列の特長ある教育活動の推進と地域連携の推進　⑺定期的な安全点検の実施　⑻情報社会における、情報端末との健全な関係性を育成するための取組』を掲げ、これまで取り組んで参りました。年度末を迎え、それぞれの目標に対する達成度等の振り返りも行っておりますが、学校評価や授業評価の結果もほぼ全ての項目で高いレベルを維持できている状況と分析しております。これは本校生徒の熱心な取り組みと共に、先生方の教育への情熱が為し得た結果であり、校長としてこれほど嬉しいことはありません。これからも現状に満足することなく何が生徒の成長のためかを考え続け、改善し続けて参ります。

学校の取り組みや生徒の活躍につきましては学校通信「雁歌学報」や、本校ＨＰ等でご報告させていただいておりますが、今年度もコロナ禍で我慢を強いられながらも、生徒達は多くの成果をあげました。特に地域連携の取り組みは益々充実し、今年度は新聞やニュースに取り上げられることが更に増え、各方面から励ましのお言葉等をいただきました。部活動も活性化の旗印のもと各部とも熱心に取り組み、運動部は少人数ながらも精一杯のプレーと頑張りを見せ、文化部も各種コンテストや展覧会、研究発表会への参加等で大いに頑張りました。各系列が専門的な学びの一環として参加している各種大会でも優秀な成績を残すことができました。これらも生徒たちと指導する先生方の頑張りが実を結んだ結果です。

ところで、地域の子供の数の減少もあり、本校の入学者数も残念ながら減少を続けております。上述のように本校の教育内容の充実度や在校生・保護者の満足度は高く、入学した生徒にとっては本当によい学校なのですが、様々な場面での説明や広報活動にもかかわらず、もどかしいのですが、入学希望者増にはつながっておりません。県立高校はその地域に住む子供たちに高校教育を授けるために置かれるものであり、そもそも高等学校は義務教育を終えた子供たちにより高度な、または専門的な学習の機会を提供するものです。そして同時に子供たちが思い描く将来の姿に導く責務もあります。本校はこの地区の主幹産業であった養蚕の技術を学ぶ場として生まれ、今はこの伊具・角田地区にある専門高校という役割を担っています。農業、工業、商業、福祉（家政）を将来の道として志すこの地区の中学生が、高校段階から本校で専門教育を受けたほうが良いと考えてくれるためには、そのニーズに応える教育内容を整備する必要があります。このことにつきましては昨年度より二本の大きな柱を立て、準備を進めて参りました。一つは大学進学を含めた幅広い進路希望への対応、もう一つは時代を見越した専門教育の内容充実及び学校の魅力向上のためのドローンの導入です。一つ目につきましては校内の体制を整え、今年度よりスタートいたしました。二つ目につきましては予算的な裏付けも必要で、実際の導入までには年単位の時間を要するものと考えておりましたが、同窓会の皆様にご賛同をいただき、導入に向けて一気に加速させることができました。多大なるご支援も賜り、今年度内には競技ドローンの機材が揃い、活動を始めることができます。このことは本校のこれからへの大きな後押しとなることであり、校長として感謝の念に堪えません。本当にありがとうございました。同窓会の皆様のご厚情にお応えできるよう、生徒・職員が一つになり、これからの伊具高校を作って参ります。

地域の子供たちが自らの人生の目標をしっかりと描きながら活き活きと学び、今後大きく変化するであろう世の中を生き抜く「生きる力」を備えた生徒を育てることが、地域の県立高校としての本校の役割です。百年を越える歴史を築き上げてこられた同窓生の皆さまに敬意を表しますとともに、母校の発展と地域の子供たちのために、これからも益々のご支援、ご協力を賜わりますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。

令和４年度総会報告

8月7日（日）午後2時　母校　2階会議室

◎協議事項

一　令和3年度 事業・会計報告ならびに承認について

二　令和4年度 事業計画・予算案承認について

三　その他

本年度の総会では、昨年度の事業及び会計決算報告、監査報告、本年度事業計画及び会計予算案が審議され、各議題共に原案通り可決しました。

本年度もコロナ禍ということもあり、参加者を本部役員と各支部長に限定して、本校会議室で実施し、懇親会の開催も見送ることとしました。湯村勇会長からは総会の開催方法等を交えながら挨拶があり、続いて小野正美校長から母校の現状と今後の展望を交えながら挨拶がありました。魅力ある教育活動を展開するための一つの手段としてドローンの活用を考えている旨の提案が農学系列や機械系列からあり、同窓会としては機械系列の競技用ドローンの導入支援にあたるということで決議されました。

支部だより

会　報

角田支部

目黒喜一

角田支部においては、ここ数年、支部総会は規模縮小した内容で開催をしております。令和4年4月15日(金)午後6時から、中華料理店「かずき」で、鈴木善一支部長主催の下、役員会を開催し、4年度の総会にむけた協議を行いました。

結果、今の状況から不可能と判断し、役員会での書面表決による会議とさせていただきました。

支部総会にご来賓として黒須貫市長、保科郷雄町長をお招きし、親睦を深めるための意見交換会を楽しみにしておりました。令和元年台風19号災害復旧・復興の最中、追い打ちを掛けるように、未だに終息の兆しが見えないコロナ禍で、私たちの生活を脅かしている大きな要因です。

令和5年度の角田支部総会・懇親会は令和5年5月28日（日）に開催予定です。今年こそ盛大に総会を開催したいものです。その折には市長、町長及び校長先生をはじめ事務局の先生方並びに関係者各位には、是非ともご出席を賜りたいと存じます。

支部活動としては、令和2年において移動研修会を行い、伊具高等学校の校歌作曲者である著名な小関裕而先生の福島市記念館を見学いたしました。先生の偉大さには感服いたしました。今年の支部研修会は、まだ決めてはおりませんが又、機会があれば母校の縁の地を訪ねてみたいものです。

令和4年11月30日発行の日本農業新聞に「夢に向かって」をテーマに伊具高校2年生、木村文音さんの「農との触れ合いは楽しいです」との心情が掲載されていました。野菜・米を育て収穫の喜びを味わい、そして畜産も試みたいといった内容です。創意と工夫をし、結果として形に現れ自身も成長することだと思っております。農業経営者となり、一翼を担っていただけるものと将来の営農ビジョンに期待をいたします。

また、角田市の回覧板を通じて伊具高校の学校通信「雁歌学報」を拝見させていただいております。市内にも数多

くの卒業生が定住しており、学報は高評価です。これからも継続的に発信をしてほしいといった声も聞こえてきます。私たち同窓会役員としても、それに応えるべく会員への周知を欠かさず行い、生徒の成長を見守っていきたいと思っております。

結びに、一日も早くマスクが外せる日が来ることを期待し、一筆とさせていただきます。

母校と川柳

丸森支部長　小野正彦

「母」と云う漢字を使った熟語があります。母国、母胎、母党、母乳、母船等々そして母校「母」の漢字から、何故か、なつかしさとやさしさを感じることができます。私の母校は伊具高校です。昭和38年までは伊具農蚕高等学校でした。その後、校名が伊具高校になりました。昭和28年、母校の普通科に入学、雁歌の里の学舎は瓦葺の木造平屋の校舎でした。雁歌の里の学舎で思う存分の高校生活を送ることができました。これも偏に、指導していただいた先生方のお陰だったと感謝しております。昭和36年、母校の教員に採用され、以来36年間、母校一筋後輩生徒の指導に当ってきました。退職後、趣味の川柳作りに励んでいます。医師の長尾和宏さんは、その著「病気の９割は歩くだけで治る」の中で、「川柳を考えながら歩くというのもおすすめです。川柳は誰でも自由に表現することができます。川柳を考えるときに頭を使います」とも言っています。初めて入選したのは、20年前の作「飼い犬に　介護されつつ散歩する」でした。新聞をみたＡさん「あんた俺のことを見て出したべ。」その通りでした。そして60年間、連れ添ってきた妻の言動から「老妻は忘れたことを忘れてる」投稿、入選、その日の夕方、妻の知人からの電話、内証の川柳があっさりばれたこともありました。

今年85歳、足が弱くなり、視力低下、耳も遠くなりました。頭にくる前に川柳作りに頑張るつもりです。老化の波は確実に押し寄せてきています。「足に来た腰にもきてる次あたま」母校の教壇で36年間、教え子の何人かは町の発展に尽力してきています。

「教え子に、教え諭され生きて行く」

大正９年に創立され、令和２年に百周年を終えた母校が地元に根ざした高等学校として末永く活躍することを念じペンを置かせていただきます。

新聞を読んで

筆甫支部長　庄司一郎

昭和43年４月、私たちは農家の後継者となるために、52名が農業科に入学しました。この年まで戦後の食糧不足により、国の施策で米の生産を増やすために開田が続きましたが、翌年には開田が禁止され、卒業の年には減反政策が本格的に導入されました。

基幹作物である米の減反政策導入により、農業に希望が持てないと同級生の半数が就職の道に進んだと記憶しています。農業の道に進んだ友も次第に勤め始め専業として残ったのは数名となりましたが、今も精力的に働いています。私も農業の道に進んだものの、勤め始め兼業農家となりました。

減反政策の影響は大変大きいようで、昭和45年からの５年間で農業従事者が２３０万人減少し４８９万人になりました。令和２年には１３６万人となり、今後も減少していくと思われ、日本の食糧はどうなるのだろうと思う日々です。

新聞のコラムに、日本のカロリーベースでの食料自給率は38％ですが、先進国の中では最下位。肥料、飼料などの輸入を勘案すると10％になるのではないか。そして先進国の中で一番先に食糧不足になるのではないかと言われています。

私も歳を重ね早いもので古希を過ぎました。作物の生産はもとより、地域を守るため、農地を荒らさないためにも農業に取り組んでいます。専業農家から脱落した私が言うのも勝手な話ですが、伊具高校の農学系列に定員の生徒が入学して、生きるための根源となる食糧を生産しながら地域を守ってもらいたいものです。

田畑に勤しむ第２の人生

農業科20回　小斎支部　松本幹郎

昭和41年４月大きな希望を胸に伊具高校の門を潜った姿が蘇ります。

農業科のクラスメイトは64名、一つの教室に押し込まれ、すし詰め状態で前後左右身動きもままならない中で３年間を過ごしました。

当時、農業は大きな転換点にあって、国は水田の減反政策を進め始めており、家業の米作りのための基礎を学ぶと意気込んでいた我々は、その目標を見失いがちになっていたことが改めて思い出されます。

卒業後は地域の担い手として期待され、熱い視線が注がれていましたが、農業に従事したのは、数えるほどで、小学校以来の同級生も８名中６名は企業等への就職となりました。

自分もご多分に漏れず、家業に従事していたものの５年目には勤めることとなり、以来勤労者と農業との二足の草鞋となりました。

定年を迎え、再雇用を経て改めて田畑の専従者となりましたが、半世紀も前の農業実習が鮮やかに蘇るとともに、懐かしさと当時の幼稚さに、時代の流れを感じています。

今、土いじりに楽しさを見出し、作業の場面ごとに色ん

な刺激がもたらされ、所謂第２の人生を謳歌し、心身を律することができていると実感しています。

伊具高校で過ごした３年間、担任の先生に恵まれ、指導いただいた先生方そしてともに恵まれ、今日においても多くの方々にご厚誼頂いておることに感謝しております。

母校は時代の変遷とともに学科改編が行われ、地域社会に求められる人材を輩出すべく尽力なされておることに、畏敬の念を抱いておりますとともに、今後の時代を見据え、地域の高校として、益々発展されますよう心から願っております。

特別寄稿

母校での学び

総合学科７期生　**池田友利**

私にとって母校は、人生の「分岐点」です。

高校時代の一番の思い出は、農業クラブでの活動でした。高校入学までは、表立って何かをすることはなく、あわよくば何もしたくないと思ってました。しかし、先生に「大会に出ないか?」、「会長にならないか?」と言われて私で良いのかと思っていましたが、勇気を出していざ発表に向けて練習する日々はとても充実していました。そして、農業科目を学ぶにつれて私も同じように農業を通して生徒の個性を引き出せる先生になりたいと思い、農業教員を目指すきっかけとなりました。これが私にとって大きな分岐点となりました。

教員となり、母校に勤めた際は、恩師と働くことができ、たくさん学ばせていただきました。先生方の生徒との関わり、真摯に向き合う姿勢に他の学校とは違い一体感がある学校です。そして、生徒たちのことをみて学校をよくするために新しいことにも挑戦する学校です。私は、先生方、生徒たちに恵まれました。今でも教え子から連絡をくれます。「先生、元気ですか?」「久しぶりに会いたいです。」など近況を聞くのがとても楽しみになりました。この生徒たちに私は、何をしてあげられたのか、考える時があります。在学中に「こうすればよかった」と思うことがありますが、教え子たちは「先生と出会えて良かった」と言ってくれます。その度に、私自身ももっと頑張ろうと思えました。

これまでお世話になった先生方、教え子たちに感謝しています。

私の分岐点には、いつも両親の存在がありました。高校３年次に急に大学に行きたいと言って行かせてくれたことで、今の私がいます。もし、行かなかったら、これまで出会ってきた方々から得た知識や経験もありませんでした。私のわがままに付き合ってくれている両親にとても感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとう!

最後に、多くの方々に支えられながら、これからも母校で学んだことを伝えていきます。

〈追記〉

３年次の皆さん、２年次の時の副担をしてましたが、覚えてますか?ご卒業おめでとうございます。高校とは全く違う環境に変わるのは、不安もありますよね。けど、大丈夫です。高校で学んだことを活かしながら、新しいことを吸収してください。

私も来年度、挑戦する年にします。不安もありますが、期待もあります。これまで、諦めてきたことをやるのは今しかないと思いました。年齢を重ねて新しいことをしようとすると失敗したらどうしようと不安になります。けど、挑戦しないと前進できません。３年次の皆さん、新生活を楽しんでくださいね。皆さんのことを応援しています。

系列紹介

農学系列

農学系列では農業の６次産業化（「１次産業の農業」×「２次産業の加工」×「３次産業の販売」）に対応した人材の育成を目指して、日々の学習や実習を行っています。

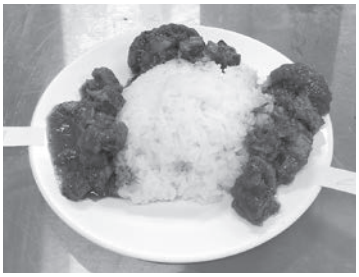
本年度は、昨年度コロナ禍で自粛していた活動を徐々に再開しながらも、密を避けるなどバランスを図りながらの学習実践を行った年度でした。

春の苗販売では、広報ＰＲをせずに開催し、コロナ禍前よりもお客様は少なくなってしまいましたが、生徒、教職員ともに以前の状況に戻りつつある手ごたえを感じられた行事となりました。

夏にかけては、野菜の販売実習やへそ大根生産組合の方のお話を聞く機会もあり、地域に出て、お客様の反応を直に感じたり、地域の特産物とその課題について知ったりできました。

秋にかけては、数年前から続く、大張沢尻の棚田で米作りを体験させていただきました。本校ＯＢの大槻さん指導の下、２年生の生徒６名が棚田での米作りに挑戦しました。急斜面にできた棚田に悪戦苦闘しながら一生懸命取り組む姿は、生徒の成長の糧となりました。また、東北放送や日本農業新聞の取材を受け、学習活動のアピールにもなりました。

冬にかけては、専門高校の魅力発信イベントでの他校と合同でＰＲ活動、丸森町役場や八雄館でのシクラメンや野菜販売等に積極的に取り組みながら、規格外へそ大根の加工のヒントを得ようと仙台市秋保にあるソーセージ工房やパン屋さんをお招きしてへそ大根入りのソーセージやスパイスカレー作り体験を実施しました。また、花のたすきプロジェクトでは町内の丸森小学校と舘矢間小学校に出向き、児童に対してプランターへの草花苗の植栽の指導も実施し、交流も行いました。

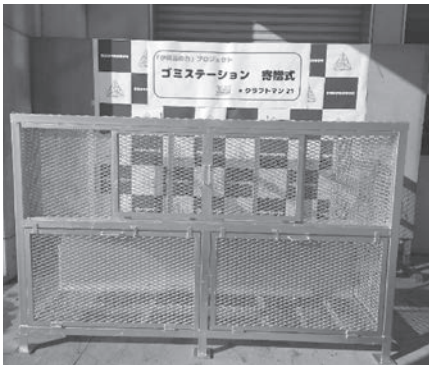


こうした活動の一環で、農業クラブ意見発表や家畜審査競技では県大会で優秀賞を獲得、家畜審査競技では県の代表として鹿児島県での全国大会に出場する機会を得ました。

今後も、食と農のオールラウンダーを目指して、少数精鋭で多種多彩な活動に取り組み全人的な成長につなげていきたいと思いますので、ご期待ください。

機械系列

本年度から取り組んだことは、Society5.0 の社会に向けた人材の育成です。一つは産業用ロボット特別教育を実施しました。これは、近年ロボットが急速に普及し、様々な業種の生産ラインで、以前よりあった溶接ロボット等に加え、協働型ロボットシステムや触覚センサーを搭載したロボット、遠隔で操作することのできるロボットなど多様なロボットが登場しています。それに対応するために本校では本県で初めて高校生対象の産業用ロボット特別教育を実施した。３年次10名がこの特別教育を終了し、ロボット化が更に進むであろう企業から内定をいただくことが出来ました。次に、プログラミング教育に取り組みました。プログラミングによるドローンの操作や、ゲームやアプリの製作を実習に取り入れ、プログラミングの基礎について学んでいます。



機械系列の特徴は、３年間全年次で取り組む「伊具高の力」プロジェクトです。１年次では、高度熟練技能者の指導の下、ちりとり等を製作し寄贈しています。２年次では、ミニコンロを製作します。常に使用者の立場にたって高度熟練技能者からの指導をいただきながら実習を行うことで技術・技能はもちろんのこと使用者（相手）の立場にたって考える力を育成しています。それは、生徒の考える力に結びつき、生徒自身からも様々なアイデアや意見がで、創造性の育成にも繋がっています。

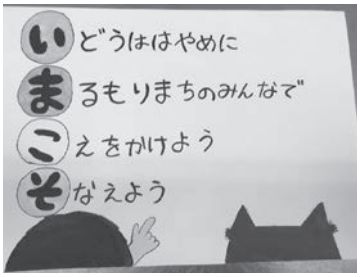
３年次は課題研究に取り組みます。地域連携事業を活用し、ものづくりで地域支援を行うプロジェクトでは、地域の方々の要望によりゴミ集積所を製作し寄贈しました。また、地域、地域企業の活性化を狙い、ふるさと納税の登録を目指し取り組んでいます。地域連携授業で出前授業を実施し、丸森中学校、角田中学校、北角田中学校で実施しました。

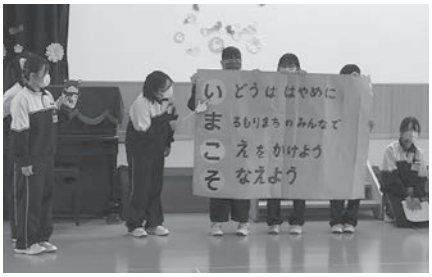
伊具高校機械系列では３年間を通して系統的に学ぶことができ、充実した３年間を過ごすことができます。人口減少という地域の課題に仙南地区の持つポテンシャルを十分に考慮し、生徒・教職員ともに向かい合うことが大切だと考えています。

福祉系列

福祉系列を選択した生徒の多くは介護職の入り口でもある「介護職員初任者研修」の取得を目指しています。介護職を目指す生徒以外にも、少子高齢社会に対する課題への取組、身近な家族の介護や福祉について、実習を行いながら専門的な内容を学んでいます。また、福祉系列では専門教科「家庭」の授業も充実しています。将来は「保育士や幼稚園教諭になりたい」、「パティシエになりたい」と大学や短期大学、専門学校へ進学を果たした卒業生も数多くいます。自分の好きなことを「職業」につなげる学習を行っています。

福祉系列の生徒は「家庭クラブ委員」として、校内外で活躍しています。「家庭クラブ」は、家庭や地域で問題点を見つけ、その問題を解決するために家庭科の学習を生かして、自分自身の力で創意工夫しながら、実践する活動です。伊具高校の家庭クラブでは「令和元年度東日本台風」を教訓として地域の中で、私たちに出来ることはないかを考え活動を行っています。今年は「災害への備えの大切さ」をキーワードに活動してきました。災害発生時に不安な気持ちを少しでも温められるように防災食を学びました。ビニール袋を活用することで洗い物を減らし、食材選択にはローリングストックの大切さを実感しました。また、大きな災害を経験していない地域の子どもたちと一緒に、防災意識を高めようと手作りの紙芝居を制作しました。「丸森町は大雨の災害が心配だから伝えたいよね」「読んでいる時に、どうしたら注目して聞いてもらえるかな？」「合い言葉で呼びかけられたら良いかもね」など、たくさん意見を出し合い完成した紙芝居が『いまこそ』です。猫とイノシシのハンドパペットも作り、読み方の練習も繰り返しました。この紙芝居は、舘矢間小学校放課後児童クラブや丸森たんぽぽ子ども園で発表する機会をいただきました。子どもたちに伝えながら、あらためて考えたことは、一人ひとりの心がけと行動力が「災害に負けないまちづくり」につながるということです。これからも、地域を支える力になれるように頑張っていきます。





情報系列

情報系列では、地域社会で即戦力として活躍できる人材を育成しています。変化の激しい現代社会において、それに対応できるビジネスに関する知識や技術はより重要なものとなっており、商業科目の学習を通じてビジネスを理解し、実践する力を育んでいます。あわせて、職業人として必要な豊かな人間性、他者とコミュニケーションを図り協働する力などを育んでいます。

本年度は町の各種イベントが実施され、感染症対策をとりながら、これまでの活動を徐々に再開した年度となりました。特に、夏に行われた齋理幻夜では、年次を超えての活動を再開することができ、総合司会や幻夜新聞など受け継いできた伝統の再出発となりました。３年次の取材する姿や手際よく新聞を作成する姿を見て、刺激を受けた１・２年次が伝統を受け継いでいくという流れを再び作っていけることに嬉しさを感じております。

また、１年次の生徒は次回も総合司会に挑戦したいと意欲を見せていたので、来年度はさらにパワーアップした総合司会にもご期待ください。

３年次の学習活動では、３年間の集大成として「みやぎふるさとＣＭ製作」、「丸森町の観光ツアーの考案」、「丸森町産の食材を使用した商品開発」を行いました。地域の方々にご協力いただきながら、これらの活動を進めて参りました。取材や打ち合わせを通して他者とのコミュニケーションを図りながら、試行錯誤して活動してきた成果が実ったときの達成感はとても大きかったようです。

また、本年度は検定試験にも力を入れた年でもあり、全国商業高等学校長協会主催の検定試験１級３種目合格した生徒がおり、表彰を受けました。今後も様々な活動を通して、かけがえのない『人財』を育成するために、万全のサポートを行っていきたいと思っております。

生徒の活躍

宮城県学校農業クラブ連盟意見発表会

優秀賞

3年　吉田航平

宮城県学校農業クラブ連盟クラブ活動紹介発表会

奨励賞

1年　武者彩乃
佐藤拓真
芳賀瑛璃花
石塚清玲
八島遥斗

宮城県学校農業クラブ連盟家畜審査競技会

肉用牛の部

団体

奨励賞

1年　芳賀瑛璃花
八島遥斗
石塚清玲

個人

優秀賞

1年　八島遥斗

全日本製造業コマ大戦2022東北地区学生大会

準優勝

3年　仙石貴尋

宮城県高等学校家庭クラブ連盟研究発表大会

「伊具高FHJ防災プロジェクト　この声が君に届くように」

優秀賞

2年　菊地瑠渚

第75回宮城県高等学校生徒理科研究発表会

優秀賞

3年　目黒太洋
安達快飛
西村聖也
渡邉利明

2年　渡邉エミリー
佐藤陽紀
木村文音
石垣裕聖
渡邊柊羽

1年　佐藤拓真
武者彩乃

仙南総合体育大会陸上競技大会

女子　走り高跳び

第2位

2年　佐藤心棚

仙南総合体育大会陸上競技大会

女子　三段跳

第1位

2年　佐藤李華

仙南新人陸上競技大会

男子

走り幅跳び

第2位

1年　大内蓮

100m

第3位

1年　八島遙斗

200m

第3位

1年　八島遙斗

女子

走り幅跳び

第3位

1年　菊地愛佳

三段跳び

第1位

2年　佐藤李華

走り高跳び

第1位

2年　佐藤心棚

フィールドの部

第3位

2年　佐藤心棚
佐藤李華
1年　菊地愛佳

仙南新人柔道大会

宮城農業・伊具合同チーム

第3位

1年　小形樹

第37回宮城県管打楽器ソロコンテスト高校生の部

銀賞

3年　吉田航平

第56回宮城県アンサンブルコンテスト予選仙南地区大会

管楽五重奏

銅賞

3年　吉田航平
2年　小野陽子
1年　髙野美空
阿部歩美
八巻蘭

第65回宮城県吹奏楽コンクール予選名取・仙南地区大会

銅賞

編集後記

本年度もコロナ禍にあるため、同窓会総会を縮小して開催いたしました。同窓生の皆様におかれましては、今年こそ旧交を温める機会を期待していたと察します。感染症法の分類が5月の連休明けには5類に引き下げられるという報道もあり、来年度の総会はコロナ禍以前のように「あぶくま荘」を会場にマスク無しで開催できるのではと期待しております。これまで以上に母校の発展にご協力を頂きますようお願い申し上げます。

また、本会報にご寄稿いただきました会員の皆様には厚く御礼申し上げ編集後記といたします。

同窓会事務局

橋浦勉
今村幹子